

《叫べど声が、出でばこそ》

——「鵜飼」「砧」と『六道講式』——

岩崎雅彦

今年の二月、四谷の紀尾井ホールで平家琵琶と声明の公演があり、『六道講式』を聞く機会があった。客席には軍記・能・仏教音楽の研究者の姿もあり、関心の高さを窺わせた。

講式は仏教の声楽である声明の一種で、日本文学史上重要な位置を占める。講式の文章は漢文訓読体で綴られ、対句を多用した装飾的文体に特徴がある。平安中期以降、中世にかけて多くの講式が作られたが、中でも源信（恵心僧都）作『六道講式』は、『平家物語』や能を始めとする作品に、音楽・文学の両面で多大な影響を与えた。源信（九四二〜一〇一七）は日本浄土教の祖とされる。その著書『往生要集』は六道の様子を詳細に記し、日本人の地獄・極楽観に決定的な影響を与えた。源信は比叡山横川の恵心院に住んだため恵心僧都と呼ばれた。『源氏物語』宇治十帖の横川の僧都は、この源信がモデルと言われる。

榎並の左衛門五郎作、世阿弥改作の「鵜飼」の前場では、禁漁区で密漁をした鵜使いの男が捉えられて殺された顛末が語られる。

ねらふ人々ばつと寄り、一殺多生の理に

任せ、かれを殺せと言ひ合へり。その時左右の手を合はせ、かかる殺生禁断の所とも知らず候。向後のことをこそ心得候ふべけれどて、手を合はせ嘆き悲しめども、助くる人も波の底に寐にし給へば、叫べど声が、出でばこそ。

鵜使いの男はふし漬けの刑にされ、川に沈められる。男がいくら叫んでも水の中なので声が出ない。残酷な刑に処された男の恐怖と苦痛が、生々しい臨場感を以て描写される。

この「叫べど声が、出でばこそ」という表現は、世阿弥作「砧」の後場にも見える。

因果の妄執の、思ひの涙、砧に掛ければ、涙はかへつて、火焰となつて、胸の煙の、炎にむせば、叫べど声が、出でばこそ。夫の帰宅を待ち侘びて死んだ妻が邪姪の業によつて地獄に墮ち、獄卒に責められる様子が描かれる。妻は煙・炎にむせば、叫んでも声が出ない。

源信の『二十五三昧式』および『六道講式』に、次のような地獄の描写がある。

先づ地獄を言はば、鉄城固く閉ちて熱鉄

を地と為し、猛火洞燃として四面に充ち塞がれり。清涼の風を楽ふと雖ども、火焰来つて骨を焦がし、冷然の水を求むと雖ども、鑊湯沸いて身を溺はす。泣けども涙落ちず。猛火眼に満つるが故に。叫べども声出でず。鉄丸喉に入れるが故に。（中略）願はくは、焦熱大焦熱の中、紅蓮大紅蓮の底、遍照の光明を放つて、速やかに受苦の衆生を拯はん。

（『六道講式』「地獄道」）  
ここには地獄の苦しみが対句の形で記される。猛火が眼を覆うため泣いても涙が出ず、鉄丸が喉に詰まって叫んでも声が出ない。源信はまた『往生要集』「阿鼻地獄」に『瑜伽論』を引いて次のように記している。

また更に熱鉄の地の上に仰ぎ臥せ、熱鉄の鉗を以て口を鉗みて開かしめ、三熱の鉄丸を以てその口中に置くに、即ちその口及び咽喉を焼き、府蔵を徹りて下より出づ。

滋賀県聖衆来迎寺の『六道絵』（鎌倉時代）には、二匹の鬼が大きな鉗で罪人の口をこじ開けて焼けた鉄の玉を飲ませようとする場面が描かれる。『六道講式』の「鉄丸喉に入れる」は、こうしたイメージを基にしている。

「砧」の妻が地獄の責め苦を受ける描写、「叫べど声が、出でばこそ」は、『六道講式』の「叫べども声出でず」に源があると考えてよいだろう。声が出ない理由は『六道講式』では鉄丸が喉に詰まるためであり、「砧」では煙・炎にむせぶため、それぞれ異なっている。理由

は異なるものの、「叫ぼうとしても声が出ない」という表現が地獄の苦しみの描写として一つの定型となっていたと考えられる。

世阿弥作の「檜垣」では、後シテの檜垣の女の幽霊が地獄の苦しみを述べるが、そこに

熱鉄の桶を担ひ、猛火のつるべを掛けてこの水を汲む。その水湯となつてわが身を焼くこと隙もなければ

という表現がある。ここに見られる「熱鉄」「猛火」の語や、水が湯となる描写は、やはり先に引いた『六道講式』の表現に基づいている。〔謡曲大観〕頭注。

作者不明の能「善知鳥」(寛正六年(一四六五)観世所演)の後場にも殺生の罪で地獄に墮ちた獵師が苦しむ様子が描かれる。

娑婆にては、うとうやすかたと見えしも、うとうやすかたと見えしも、冥途にしては化鳥となり、罪人を追つ立て鉄の、嘴を鳴らし、羽をたたき、銅の爪を磨ぎ立てては、眼をつかんで肉を、叫ばんとすれども、猛火の煙にむせんで声を、上げ得ぬは、鴛鴦を殺しし科やらん。逃げんとすれど立ち得ぬは、羽抜け鳥の報いか。

化鳥に責められる獵師が、叫ぼうとするが、猛火の煙にむせんで声を上げることができない。これも「砧」と同類の表現と言えらる。ただし『六道講式』では、猛火が影響を与えるのは眼で、「砧」「善知鳥」で火の煙が喉に影響するのは異なる。また『六道講式』には「猛火洞燃として」「火焰来つて骨を焦がし」「猛火眼に満つる」と、火についての描写はある

が、煙についての記述はない。このような違いはあるものの、『六道講式』一つの源とする「叫べども、声出でず」という表現が、地獄の受苦の定型的描写として広く使われていて、能の作者たちがそれを利用したことが想定できる。

「叫べども、声出でず」は、本来は地獄の苦しみの描写に使われる表現で、「砧」や「善知鳥」では、その形に則つて使われている。ところが、「鵜飼」では少し違う使われ方をしている。この表現が使われる場面は、「砧」や「善知鳥」では、地獄という死後の想像の世界であるが、「鵜飼」の場合は鵜使いの男が体験した現実の出来事である。鵜使いは同業者に捉えられて必死に命乞いをするが、許されずに殺される。「叫べど声が出でばこそ」は、ここでは凄惨な事件の描写に迫真性を持たせる表現となっている。地獄の苦しみの表現として本来の形で使われている「砧」や「善知鳥」に対し、「鵜飼」での使われ方は、同じ苦痛の表現ではあるが本来の形からずれており、表現の新たな文学的展開と言うことができる。

「鵜飼」で鵜使いの男が殺される場面の描写には「ねらふ人々ばつと寄り」といった擬態語や、「かれを殺せと言ひ合へり」といった直截的な表現が見られる。これらの表現によって、この場面の緊迫感がより増幅される。「鵜飼」と同じく密猟によって殺された漁師の幽霊がシテの「阿漕」では、

夜々忍びて網を引く。暫しは人も知らざりしに、たび重なれば頭れて、阿漕を縛

め所も変へず、この浦の沖に沈めけり。と、密猟が露頭し、縛られて海に沈められたことが簡略に語られるだけである。「鵜飼」では、大勢の者が男を捉えて騒ぐ様や、男が命乞いをする様子が詳しく描かれる。男は「一殺多生の理に任せ」て殺される。「一殺多生」

は、一人の悪人を殺すことによって多くの人の命を助けるといふのが本来の意味である。密猟者を殺すことの正当性を説くのにこの言葉を使うのは、かなり無理がある。罪を犯したとはいえ、無抵抗で許しを乞う者を有無を言わず大勢で殺すのは何ともむごい。

ところで、「鵜飼」や「阿漕」と非常によく似た話が『徒然草』百六十二段にある。遍照寺の雑役に従事する承仕法師が、広沢の池の鳥を飼いならして堂におびき入れ殺していた。

村の男ども起りて入りて見るに、大雁どもふためきあへる中に、法師まじりて、打ち伏せ、ねぢ殺しければ、この法師を捕へて、所より使庁へ出だしたりけり。

雁を殺していた法師は村の男たちに見つかり、捉えられて検非違使庁に突き出された。「鵜飼」とは違い、村人たちの行動は冷静でごく常識的である。

夜の闇の中、男がふし漬けの私刑に処される「鵜飼」の陰惨な描写からは、中世の共同体の掟の厳しさや集団心理の恐ろしさが感じられる。『六道講式』は、受苦の衆生を地獄から救うことを述べて終わる。「鵜飼」の男も、最後は奈落から仏所(極楽)へと送られた。

(国学院大学非常勤講師)